

ストックホルムセンターだより

第7号

1. はじめに～新年度を迎えて～

センターだよりは本号で2年目に入りました。私もストックホルム滞在が2年目となりましたが、北欧の暗く寒い冬を体験したあとに迎える春の素晴らしさをしみじみ味わっています。雪や氷が消え、青空に鳥の囀りがあり、兎達も再びオフィス前の茂みに姿を見せ始めました。スウェーデンで春を告げる色はイースターを飾る水仙の黄です。日本の春は桜霞の色ですが、ストックホルムでは桜は5月の花です。平成16年度を共に過した澤登ゆり子・土屋友紀研修生が3月末に帰国し、4月に藤井貴子平成17年度研修生を迎えました。今年度のオフィスは4人の体制です。

昨年度を振り返ると、各種対応機関への訪問、JSPS主催の会合、Stockholmで開催されたPan-European Forum of Science (Euro Science Open Forum)への参加、UT-Forum(東京大学)・日瑞バイオミッション等への協力や訪問者への便宜供与等があり、大学や対応機関を訪問して多くのスウェーデン研究者の話を聞く機会に恵まれました。特に印象的だったのはスウェーデン研究者が基礎研究の段階から研究を社会へ還元出来る成果に仕上げようとする意識を強く持っていることでした。実利を重んじる事で大学の価値も高めているのです。基礎研究の重視と共に応用、実用化を忘れない研究者の姿勢がこの国に製薬会社やベンチャー企業を生み出す力となっているようです。また日瑞間の違いとして強く印象付けられたのは、スウェーデンでは美しさと堅牢さを兼ね備えた素晴らしい建物や施設の中で教育・研究がなされていることです。地震や台風がなく、200年間戦争も無いスウェーデンでは、100年前の建物も立派に現役です。こんなことが大学の建物を立派に造る背景にあるのでしょうか。大臣、学長等トップの地位を占める女性達にも多数お会いし、積極的な女性の登用に感心しました。

日瑞は地勢学的にはユーラシア大陸をはさんで東西に位置する遠く離れた国ですが、両国の交流はタウンベリー(1775—1776)の医師としての出島滞在に遡ります。彼がリンネの弟子で本格的な植物学者であったことは日瑞間の交流が学問の分野で幕を開けた事実を示しています。最近日瑞間では、理研とカロリンスカ研究所が研究協力協定を結び、JSTとVINNOVA及びSSFとの間でも新たな事業が開始されました。また、二国間交流としてスウェーデンバイオ視察団(成人病)が日本へ、日本からもバイオ使節団がスウェーデンを訪れ、将来も交流は益々盛んになろうとしております。スウェーデンの総人口は僅か900万人ながら最も実りある交流成果が期待される国の一つであります。

JSPS ストックホルム研究連絡センターでは、本年度最初の行事として6月17日にストックホルムでサイエンスフォーラムを開催いたします。「材料科学の最前線」というテーマで日瑞から講演者をお迎えします。

2005年度も当センターが日瑞間の研究交流、人材交流、情報交流等に力を尽くすことが出来ますようお願いしております。(岡崎)

2. センターの行事・関連イベント

JSPS Alumni Club in Sweden 2005 年度第 1 回幹事会の開催

2005 年 4 月 14 日(木)13:30 よりストックホルム世界貿易センターにおいて、今年度最初の幹事会を開催しました。今回の会合は、先の 2 月に同窓会が正式に発足した後の第 1 回の幹事会でした。冒頭に Ma Li Svensson 会長からの挨拶、次に水田事務官から挨拶及びセンター職員の異動について報告がありました。

その後、レン職員から、同窓会ニューズレターの発行、ウェブページの更新について説明、確認があり、続いて水田事務官からは、3 月に合意のあった 2005 年度の活動計画等の説明がありました。

続く討論では、Ma Li Svensson 会長司会進行のもと、主としてセミナー等の具体的内容及び各種会員の募集・決定手続きについて話し合われました。

なお、今回の合意事項は次のとおりです。

・ 2005 年 10 月 31 日(月) 第 2 回幹事会及びセミナーの開催

セミナー：日瑞の文化・社会比較関連の講義

(講師 2 名、在瑞日本人及びスウェーデン人から JSPS が人選)

・ 2006 年 1 月頃 総会及びシンポジウムの開催

シンポジウム：同窓会の会員数名が、自身の研究を日本とのかかわりを含めて発表し、その後一般参加者も含めて議論を行う。

・ 同窓会会員の募集等について

正会員：現行どおり(JSPS にて情報を入手次第、案内を送付)

準会員：JSPS にて広く受け付ける(団体の取扱いは慎重に行う)

ニューズレター、セミナー等の案内を送付

名誉会員：引き続き議論を行う

同窓会が正式に発足してから最初の幹事会でしたが、非常に活発な意見交換が行われました。今回の合意事項に基づき、今後も積極的な同窓会支援活動を行っていきたいと思います。(藤井)

同窓会幹事と JSPS スタッフ。今回は幹事 8 名
中 7 名の参加があった。



Meeting Point Japan への参加

2004 年 4 月 14 日(木)ストックホルム世界貿易センターにおいて、瑞日基金及びスウェーデン大使館投資部共催の Meeting Point Japan が開催されました。

今回は、同窓会幹事会終了後の 16 時より瑞日基金と日本学術振興会との共催で「An update on Swedish-Japanese research cooperation」と題するセミナーを開催しました。今回のセミナーは日本とスウェーデンの研究協力を携わる大学・産業界の関係者が集ま



り、これまでの経験を共有するとともに、フェロシップを中心とした最新の情報を提供する目的で行われたものです。

前カロリンスカ研究所学長 **Hans Wigzell** 氏

冒頭に共催機関の代表から挨拶があった後、在スウェーデン大使館赤池一等書記官から「Trends in Japanese Research Policy」、続いて Hans Wigzell 前カロリンスカ研究所学長より「Swedish-Japanese

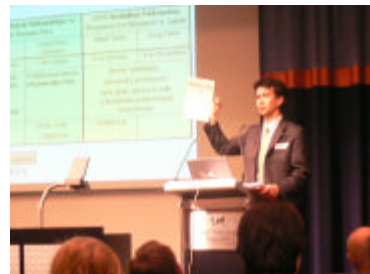
research cooperation-Looking back and head」と題する講演がありました。その後、各研究機関の代表者よりフェロシップを中心とした説明が行われ、JSPS からは、水田事務官によるフェロシップの説明のほか、同窓会の Ma Li Svensson 会長より、同窓会の紹介がありました。最後は Lennart Stenberg 前在日スウェーデン大使館参事官の司会の下、さらなる研究協力に向けてのフリーディスカッションが行われ、短い時間でしたが密度の濃いセミナーとなりました。



瑞日基金 **Edvard Fleetwood** 事務局長



在スウェーデン大使館赤池一等書記官



JSPS フェロシップについて説明をする水田事務官

セミナー終了後は全体会があり、主催者である瑞日基金の Magnus Vahlquist 会長や、大塚清一郎在スウェーデン日本大使、Mikael Lindstoröm 在日スウェーデン大使等の挨拶や講演のほか、在日経験のあるスウェーデン産業界の代表者数名による瑞日交流に関するパネルディスカッションが行われました。

この全体会の前後で当センターは展示ブースを設置し、フェロシップについての紹介などを行ったほか、他の参加者などとの交流、情報交換など、有意義な活動を行うことが出来ました。

第1回の昨年は、センターのコロキウムと重なってしまいましたが、今年は本センターも本イベント（Meeting Point Japan）に積極的に参画することができました。学術関係者だけでなく、幅広いフィールドの方々と交流できたことは、本会の事業を広く周知し、日瑞の人的ネットワークを拡大する上でも大変貴重な機会となったと思います。（藤井）



JSPS Exhibition ブースの様子(写真左、中央)



バグパイプを演奏する大塚在瑞大使(写真右)

3. ニュース&トピックス

日瑞の学術協力の動向

<日瑞ナノバイオテクノロジーワークショップが開催される>

2月28日から3月2日にかけて、ルンド大学において、スウェーデン戦略科学財団（SSF）及び文部科学省の共催による「第3回日瑞ナノバイオテクノロジーワークショップ」が開催されました。

本ワークショップは、日瑞両国において、ナノ・バイオエレクトロニクスの研究領域で、第一線で活躍している研究者に最先端の研究について講演していただき、相互に議論を深め、本研究領域における両国間の融合を検討する場とすることを目的として、2002年以降開催（2002年はスウェーデン、2003年は日本）されているものです。

ワークショップの冒頭に、佐藤透文部科学省材料開発推進室長及び Anders Sjolund スウェーデン戦略研究財団企画部長から挨拶があった後、日本側は、相澤益男東京工業大学長を代表者として12名、スウェーデン側は、Thomas Laurell ルンド大学教授を代表者として18名が、文字通り最先端の研究についての講義を行い、活発な議論が繰り広げられました。最終日の3月2日には、ルンド大学の関連研究施設及び近隣の IDEON サイエンスパークの視察も企画され、日本の研究者の方々にスウェーデンの現状をじっくりとご覧いただける機会となりました。（水田）



講演をする相澤東工大学長と会場の様子

<バイオミッションが訪瑞>

2月28日から3月4日にかけて、御子柴克彦東京大学医科学研究所教授を団長とする7名の日本からの「バイオミッション」がスウェーデンを訪問しました。このバイオミッションは、2002年にスウェーデンのエストロス教育科学大臣（当時）を団長とするスウェーデン側バイオミッションが訪日し、理化学研究所等の関連施設を訪問したことを契機に、2003年10月の日瑞科学技術協力合同委員会及び2004年9月の田村文部政務官（当時）とエリアソン教育科学副大臣との間の会談における合意を受けて、今回実施されたものです。

今回のミッションは、ゲノム分野、脳神経科分野など、すでに両国の協力体制がある分野については更なる展開を図り、また、



カロリンスカ研究所で発表を行う御子柴団長

17年度から我が国でプロジェクトが動き出す、感染症、分子イメージングの分野及び両国に強みのある植物科学の分野については、今後の協力体制の構築を目指して情報交換、意見交換

等を実施することを目的として、文部科学省が派遣したもので、両国の学术交流の促進を目的とする当センターも、協力機関として様々な面からサポートを致しました。

4日間というタイトなスケジュールの上、氷点下 25 度まで冷え込んだ日があったほど厳しい寒さの中でしたが、同ミッションは、



スウェーデン南部のルンド大学からスタートし、ウプサラ大学、王立工科大学及びカロリンスカ研究所を訪問して、同分野においてスウェーデンを代表する又は今後大いに活躍が期待されている約 40 名の先生方と、最新の研究について情報交換を行うとともに、今後の協力の可能性等について意見交換を行いました。

教育・研究・文化省にて

さらに同ミッションは、教育・研究・文化省のエリアソン副大臣やサミュエルソン研究政策局長を訪問し、我が国の最新のライフサイエンス政策について紹介するとともに、両国の同分野における学術協力について率直な意見交換を行いました。本ミッションが、今後の両国におけるライフサイエンス分野における協力の大きなステップとなったものと確信しております。

今回のバイオミッションのメンバーは、以下のとおりです。(水田)

団長	御子柴克彦 (東京大学医科学研究所 脳神経発生・分化分野 教授 / 理化学研究所脳科学総合研究センター 発生・発達研究グループディレクター)
副団長	林崎 良英 (理化学研究所ゲノム科学総合研究センター 遺伝子構造・機能研究グループプロジェクトディレクター)
団員	大久保善朗 (日本医科大学 教授)
団員	堀井 俊宏 (大阪大学微生物病研究所 教授)
団員	出村 拓 (理化学研究所植物科学研究センター 形態制御研究チーム チームリーダー)
団員	高山 誠司 (奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科 助教授)
団員	安田 賢二 (東京大学総合文化研究科 助教授)

< 研究法案が提出される >

3月22日、スウェーデンにおける新研究基本法案「よりよい生活のための研究」が国会に提出されました。スウェーデンでは、政府の重要な基本政策を国会の承認を得て基本法 (Proposition) として定めており、今回の法案は、2005年から2008年までを対象とするものです。

本法案は、スウェーデンの研究立国としての立場 (国際競争力) を強化する観点から、23.4億クローネ (約362.7億円 (1SEK = 約15.5円)) の新規研究開発資金の配分に係る見積もり額を示すもので、諸施策は、成長と持続可能な開発のためのイノベーションを刺激するため、「純粋基礎研究」と「特定のニーズに基づく研究」の相乗効果を生み出すことを目標としています。主な施策は、以下のとおりです。(予算額は、いずれも予算の増額分を意味しています。)

最優先研究分野

医学研究 : 4 億クローネ (約 62 億円)

技術研究 : 3.5 億クローネ (約 53.5 億円)

環境及び持続的開発 : 2.1 億クローネ (約 33.5 億円)

〔 3 分野について、リサーチカウンシル (VR)、労働生活・社会リサーチカウンシル (FAS)、環境・農業科学・地域計画リサーチカウンシル (Formas)、技術革新システム庁 (VINNOVA) 及び国家宇宙庁により配分 〕

センター・オブ・エクセレンス (COE)

センター・オブ・エクセレンス : 3 億クローネ (約 46.5 億円)

〔 最長 10 年、年間 1 千万クローネが上限
各リサーチカウンシル及び VINNOVA により配分 〕

若手研究者の養成

大学への直接資金 : 5.21 億クローネ (約 80.8 億円)

若手研究者 : 1.5 億クローネ (約 23.3 億円)

大学院教育 : 1 億クローネ (約 15.5 億円)

〔 上段は、大学院教育及びポストクポジション等の目的に使用
中段及び下段は、各リサーチカウンシル及び VINNOVA に配分 〕

産学間の知識の移転

持株会社の資本増強 : 6 千万クローネ (約 9.3 億円)

産業研究の研究所に対する長期戦略的出資 : 1.1 億クローネ (約 17.1 億円)

国家に不可欠な領域の研究開発 (輸送機器等) : 1.2 億クローネ (約 18.6 億円)

中小企業の研究へのアクセスの促進 : 1 千万クローネ (約 1.6 億円)

(後半 2 項目については、VINNOVA に配分)

その他

研究インフラの整備、録音物及び録画物にかかる国立公文書館の整備、男女共同参画研究、宇宙研究、教育研究、デザイン及び EU における研究協力のためのスウェーデンの組織等に対して、増額出資がなされる。

なお、本法案に対しては、野党 4 党が初めて研究政策について合意したとして、以下のよう
なポイントの決議案を議会に提出しています。

- ・ 政府提出法案では不十分であり、今後 5 年間で、さらに 2 億クローネ（約 31 億円）の研究開発投資が必要である。
- ・ 追加的投資は、大学及び専門大学に直接配分されるべきである。
- ・ リサーチカウンシル、政府当局、研究財団及び大学・専門大学の理事会は、学术界によって選ばれた個人によって構成されるべきである。
- ・ 社会保障が受けられる雇用形態の博士課程学生の割合を増大させるべきである。個々の研究者は、様々な方法で研究資金を調達することを可能とするべきであるが、学術機関は、さらなる博士課程学生を雇用するべきである。
- ・ 博士号取得者に対して、リサーチアシスタントとしてさらに多くの雇用を創出するべきである。

(教育・研究・文化省のプレスリリース <http://www.sweden.gov.se/sb/d/586/a/41273>

ファクトシート <http://www.sweden.gov.se/content/1/c6/04/12/76/a3b1c54d.pdf>

Dagens Nyhetel 2005 年 4 月 6 日 (水) 6 面ディベート 参照)(水田)

<教員養成プログラムが批判の対象に>

前号では、スウェーデンでも学力低下が話題となっている旨報告しましたが、今回も、学力低下に関連した動きを追ってみました。

3 月 22 日に、スウェーデン高等教育庁が、スウェーデンにおける教員養成の在り方について、500 ページに渡る報告書を公表しました。この報告書によれば、

教員養成課程の重要部分を、(教員養成課程の)全員の学生が受講していない。25 機関中 16 機関において、「どのように子どもに読み書きを教育するか」といった事項が必修とされていない。わずか半数の学生が、どのようにテストを作成し、児童生徒を評価し、グレードを付けるかについて学んでいるに過ぎない。コンピュータの使い方や学校における IT の活用についても欠陥がある。

学生に対する要求が低すぎる。ほとんどの学生が、一週間当たり 30 時間以下しか学習していない。多くの学生が、プログラムの主要部分について、「教科書の裏表紙を読みさえすれば単位を取得できる」と言っている。

研究との関係が弱く、教員養成プログラムのわずか 5 分の 1 の教員が博士号を保有しているに過ぎない。

といったことが指摘されています。

これらの原因は、数年前に、専門大学に追加的な財源を措置せずに高等教育改革の一環として制度改正を急いで行ったことにあるとされています。具体的には、教員養成機関(大学及び専門大学)及び学生の双方に、履修における選択幅を広げたのですが、ガイダンスが不十分なまま新たな制度に移行したため、多くの重要なコースが選択教科とされ、学生にとっては、良い教員になるためには何を勉強する必要があるのかを知ることが困難となったとされています。もし今の状態の教員養成方法が放置された場合には、児童生徒が危険な状態に陥るとの警鐘もなされています。

また、この改革の帰結として、多くの学生が、体育や歴史のような人気のある教科に集中し、自然科学系や就学前教育に興味を持つ学生が減少しているとのこと。

この報告書を受けて、バグロツキー教育・研究・文化大臣は、高等教育令が何を意図しているのか誰からも明確になるよう同令の文言を明確にする必要があり、今春中にも行う考えがある旨コメントしています。(水田)

(Dagens Nyhetel 2005 年 3 月 22 日 10 面、Svenska Dagbladet 3 月 22 日 7 面参照。)

【編集後記】

4 月 1 日よりストックホルム研究連絡センターの研修生として着任いたしました藤井と申します。また、1 年という短い間ですが、本センターだよりの担当を勤めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

今年度は岡崎センター長、水田事務官、現地職員の Hanna Lönn、そして私と職員 4 人の少人数ではありますが、毎日楽しく仕事をさせていただいております。

自然豊かな北の地に来てから早 1 ヶ月が経ちました。着任 3 日目にしてオフィスの敷地内で、よもや鹿が目の前をびよびよ飛んでいく様を見るとは、少し前まで予想だにしていませんでした。市街から 1 キロばかりも歩けば、広大な湖に雁や白鳥が憩う姿にも出会います。東京砂漠から飛び出してきた身には何もかもが新鮮に、美しくうつりますが、口をあけて感動ばかりもしてられません。



中央が岡崎センター長、後方右手より水田事務官、Hanna Lönn、藤井研修生(東京工業大学)

日本では独立行政法人化後、各課題を抱えた大学職員が難題に追われながら働いています。私も離れたこの地から、何かしらの手土産を持って日本へ帰るつもりであります。スウェーデンは行き届いた福祉、教育制度の充実など見習うべき点も多いかと思いますが、それらをできるだけ色眼鏡を通さずに観察し、勉強できたら、というのが私の抱負です。(藤井)

Edit

監 修: 岡崎 恒子 (ストックホルム研究連絡センター長 E-mail:t-okazaki@jsps-sto.com)

編 集 長: 水田 功 (ストックホルム研究連絡センター事務官 E-mail:i-mizuta@jsps-sto.com)

編集担当: 藤井 貴子 (研修生 E-mail:gakushin2@jsps-sto.com)

執 筆: 岡崎 恒子、水田 功、藤井 貴子

JSPS Stockholm office Fogdevreten 2, S-171-77 Stockholm, Sweden

TEL +46 08 5088 4561 FAX +46 (0)8 31 38 86 <http://www.jsps-sto.com>